

令和元年9月30日

## 若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201880273  
氏名 関口 佐系  
(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。  
なお、下記記載の内容については相違ありません。

### 記

1. 派遣先: 都市名 パリ (国名 フランス)
2. 研究課題名 (和文) : ルソーの政治哲学における政治的諸原理と市民宗教
3. 派遣期間: 平成・令和 30年 9月 1日 ~ 平成・令和元年 8月 31日 (365日間)
4. 受入機関名・部局名: ソルボンヌ大学・文学部哲学科
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

報告者は、フランス・パリのソルボンヌ大学文学部哲学科に客員研究員として1年間滞在し、上記の研究課題を遂行した。本研究は18世紀フランスの思想家ジャン＝ジャック・ルソーの政治的主著である『社会契約論』を分析対象とし、その末尾で論述される市民宗教論について、同時代の思想家との論争からルソーが独自の構想を形成していった過程を検証するものである。本研究の特徴はルソーの政治思想および市民宗教論を通時的な視座と共時的な視座の相互連関から考察する点にあり、前者については古典的テキストからルソーが継承した論点に着目することでルソーの問題意識を同定し、後者については不寛容や狂信といった近代に特有の論争を参照することでルソーが政治的テキストで宗教を扱った意図を考察した。本研究課題に即して、派遣先では主にフランス国内外の図書館に保管されている資料の収集・分析にあたった。ソルボンヌ大学をはじめとする各大学の図書館やフランス国立図書館では、日本では手に入らない多数の一次文献や二次文献にアクセスすることができた。18世紀フランスにおける信仰をめぐる論争に着目する本研究にとって、ルソーやかれと議論を交わした思想家たちが手にしたであろう当時の著作物に触れることは新たな発見の連続であった。とりわけ本研究は「狂信(fanatisme)」という用語がどのように使用されているかに焦点をあててルソーおよび周辺のテキストを精査し、この語が神学的な議論を超えて政治的な議論で使用されるようになったこと、さらに狂信については特定の意見や信仰ではなく市民社会への破壊的な態度が問題視されていることを詳らかにした。ここから本研究はルソーの狂信批判に照らして市民宗教の意義を考察し、主体的に政治に参加する主権者としての有徳な市民と扇動者の言説に盲目的に追従する狂信者との対比を強調することで、『社会契約論』の末尾で既存の宗教を政治的な観点から批判したルソーは市民宗教の教説をとおして国家に対する狂信の脅威を克服しようとしたことを明らかにした。

## 6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

如上の研究内容について、2019年7月にスコットランド・エディンバラ大学で開催された国際18世紀学会にて、“*Historiography and Fanaticism as the Problem of the Civil Society: On the Dialogue between Rousseau and Voltaire*”のタイトルで口頭発表を行った。本報告は18世紀フランスで繰り広げられた狂信をめぐる論争に光をあて、そこでは歴史叙述が狂信の危険性を証明する根拠として使用されていることを論じた。さらに具体的な議論のひとつとしてルソーとヴォルテールの狂信批判を取り上げ、両者の狂信に対する理解の差異が政治思想の相違のうちに見られることを示した。報告の際にはフロアから質問やコメントがあり、現在はそれらの議論をもとに加筆・修正を施している。今後は、論文としての体裁を整えたいうで英文ジャーナルへの投稿を目指す。

今回の派遣では、本研究は18世紀フランスにおける宗教や信仰にかかわる問題の諸相およびそれに対する思想家の応答について考察を深め、ルソーが市民宗教論を執筆した背景には狂信や無神論といった問題への危機意識が潜んでいることを明らかにした。この過程で近代の政治的テキストにおける歴史叙述の重要性が改めて浮き彫りになったため、今後の研究では、ルソーが自らの政治思想を形成するうえで古代の歴史をどのように利用したかについての考察を深めていく。具体的には、ルソーが古代ローマ史を叙述する際に依拠したCarlo Sigonio, *De antiquo jure civium romanorum* (Venice, 1560)を参照しつつ『社会契約論』や『コルシカ国制案』の記述を分析することで、ルソーが理想の共和国や市民像を古代ローマの歴史に見出したと理解してきたこれまでの通説を超えて、むしろ共和国が腐敗した理由を制度の欠陥のうちに見出していることを明らかにする。この点については現在、予備的な調査と考察を重ねており、2019年度中には論文にまとめる予定である。

## 7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

近代政治哲学における政治と宗教をめぐる根源的な問いに取り組む本研究にとって、本プログラムに採用されたことで世界トップレベルの研究機関において1年間の研究活動に専念できたことは、とりわけ以下の3点においてきわめて有意義であった。

第一に、研究資料を拡充することができた点である。上述のとおりフランスの図書館では日本で入手困難な資料に直接アクセスすることができ、本研究課題を進めるうえで分析対象となるテキストの幅が広がり、論述の厚みや説得性を増すことができた。また外国語(とくにフランス語)圏における豊富な二次文献を入手できたことも、問題意識の深化や独創性の補強において役に立った。

第二に、多種多様な研究セミナーに参加して知見を広めることができた点である。ソルボンヌ大学の政治哲学にかんするセミナーには若手の研究者から学外の著名な研究者まで幅広い層の研究者が参加しており、そこで扱われるテーマは古典的テキストを材料としたものや現代の規範理論に即したものなど様々であった。たとえばフランスにおけるマイノリティやフェミニズムといったアクチュアルな争点にかんするセミナーでは、最新の研究動向に触れるとともに、現代社会の生の声を掬い上げつつ政治哲学が応答すべき課題を可視化していく様を目の当たりにした。

第三に、国際的な場で研究成果を発表する経験をとおして豊かなネットワークを培えた点である。前述のとおり、報告者は派遣先でのセミナーに加えて、国際学会で発表する好機を得た。今回の発表では幅広い分野の研究者と交流することができ、自分の研究課題について新たな視点やさらなる発展の余地を見出すきっかけを得るとともに、関心を共有する海外の研究者たちと国際交流の場を展開させていく展望が開けた。幅広い領域の研究者と交流する中で知見を広めつつ、多様な問題関心を持った研究者とのネットワークを構築できたことは、本プログラムをとおして得たかけがえのない財産である。さらにこうした国際的な舞台での発表の経験は、報告者が今後の研究活動において外国語で研究成果を発信していく上でも大いに役立つことが期待される。とくに日本の学術研究は高いレベルに達しているが、国際的な発信力の低さゆえに認知されていない場合が多い。このような欠点を克服して日本の学術研究を振興していくためにも、外国語による研究成果の発信に積極的に取り組むことは欠かせない。本プログラムによる派遣で学んだ経験を大いに活かしつつ、将来的には日本の学術研究および諸外国との学術交流の発展に貢献できるよう、今後も自らの研究課題を進展させていきたい。